２０２４．８．４（日）使徒１７：１６～２１

17:16　さて、パウロはアテネで二人を待っていたが、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えた。
17:17　それでパウロは、会堂ではユダヤ人たちや神を敬う人たちと論じ、広場ではそこに居合わせた人たちと毎日論じ合った。
17:18　エピクロス派とストア派の哲学者たちも何人か、パウロと議論していたが、ある者たちは「このおしゃべりは、何が言いたいのか」と言い、ほかの者たちは「彼は他国の神々の宣伝者のようだ」と言った。パウロが、イエスと復活を宣べ伝えていたからである。
17:19　そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが語っているその新しい教えがどんなものか、知ることができるでしょうか。
17:20　私たちには耳慣れないことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなことなのか、知りたいのです。」
17:21　アテネ人も、そこに滞在する他国人もみな、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。

＜説教＞

パウロは第２回伝道旅行の途中、ベレヤからアテネにやって来ました(15)。その経緯は13−15 節に記されていました。パウロとシラスがイエス・キリストの福音を宣べ伝えたベレヤでは、多くのユダヤ人がイエス・キリストを信じ、またギリシア人の貴婦人たち、男たちも少なからず信じました(12)。しかしテサロニケからユダヤ人たちがわざわざやって来て、また群衆を扇動して騒ぎをお越しました(14)。兄弟たちはすぐにパウロを送り出して海岸まで行かせました。シラスとテモテはベレアにとどまりました(14)。パウロはアテネまで行き、彼を案内した人たちが帰るときに、できるだけ早くパウロのところに来るようにというシラスとテモテへの指示を託したのでした(15)。そのようにしてパウロが二人の来るのを待っている間のアテネでの出来事が 16 節から 34 節に記されています。

アテネは現在はギリシャの首都です。当時はローマ帝国の支配下にありましたが、〈アレオパゴスの評議会〉（19 欄外注）による自治民主政治が行われていました。アテネの名の由来となったギリシア神話の女神アテナを祀るパルテノン神殿の装飾彫刻はギリシア美術の傑作でした。アテナはゼウスの頭から生まれたといわれ、学問、技術、芸術、知恵、都市の自治と平和を守る戦いをつかさどるギリシア神界最大の女神です。また、当時の代表的哲学学派の〈エピクロス派とストア派の哲学者たち〉(18)がいました。そのように、アテネは学問、技術、芸術、哲学、弁論術、文学、美術などの分野でギリシア文化の中心地であり、同時に異教、偶像礼拝が大いに盛んな地でした。そんなアテネの〈町が偶像でいっぱいなのを見て〉パウロは〈心に憤りを覚えた〉のです(16)。〈偶像〉はもちろん自然にできたのではなく、人間が礼拝するために〈金や銀や石、人間の技術や考えで造ったもの〉(29)です。パウロがこれまで行き、また見て来た地中海世界の多くの場所は異教の地であり、偶像もいろいろあったでしょう。リステラではバルナバがゼウスと呼ばれ、パウロはヘルメスと呼ばれ、ゼウス神殿の祭司がいけにえを献げようとしたこともありました(14:11−13)。しかしアテネはこれまでの場所に比べても断トツに〈偶像でいっぱい〉で

した。それでパウロは〈憤りを覚え〉ました。もともとはアテネではシラスとテモテが来たら福音宣教を始めようとパウロは考えていたのでしょう。しかし、その前にアテネの町の様子を見て、パウロはもう我慢がならなくなってしまったようです。一人でも偶像と、いやそれを造って拝んでいる人間と、そして人間をそのように惑わし支配している悪魔と戦わなければならないと聖なる怒りを燃やしたのです。

それでパウロは、いつものように（特に安息日には）ユダヤ教の会堂に行ってユダヤ人たちや神を敬うギリシア人たちに、「十字架の死と復活のイエスこそキリストです」と福音を宣べ伝えました。そしてそれ以外の時は〈広場〉に行って〈そこに居合わせた人たち〉すなわち異教徒たち偶像礼拝をしている人たちと〈毎日論じ合〉いました(17)。〈広場〉は遊び場ではなく、人々が集まる「市場」であり、大事な生活の場でした。人々は〈毎日〉そこに出て行って〈何か新しいことを話したり聞いたり〉して〈日を過ごして〉いました(21)。そんなアテネの人々がどうしても聞かなければならない、知らなければならない、信じなければならない〈新しいこと〉をパウロは（もちろん聖書に基づいて）宣べ伝え、人々と〈論じ合〉いました。それは〈イエスと復活〉(18)についてでした。

そのようにパウロと論じ合った人々の中に〈エピクロス派とストア派の哲学者たちも何人か〉いました(18)。〈エピクロス派〉は神々の存在は認めますが、それは人間と何の関係もない神々です。したがって人間は何事にも煩わされずに自分がやりたいことをして神のように生活するのが良いとしていました。〈ストア派〉は、あらゆるものに神が宿り、一切万有は神であり、神と世界とは本質的に同一であるとする「汎神論」を唱え、禁欲的（ストイック）であることを良しとする哲学でした。どちらも聖書の教えとは違います。結局彼らはパウロの言っていることがさっぱり分かりません。「このおしゃべりは、何が言いたいのか」との応答はまさにそれでした。「彼は他国の神々の宣伝者のようだ」とは、どういうことか。パウロが「神々」を宣べ伝えたはずがありません。「生ける神の子、即ち神であるイエス」と、「そのイエスを世に遣わし、死からよみがえらせた父なる神」のことを聞いて「神々」と理解したのでしょう。または「イエス」という男の神がいて、他に「復活（アナスタシス)」という女神がいるので「神々」と理解したのかもしれません。とにかくパウロが宣べ伝えたこと（説教）をアテネの哲学者たちは正しく理解できませんでした。それほどパウロが宣べ伝え、説教した〈イエスと復活〉の福音は、今まで聞いたことのない、全く〈新しい教え〉(19)でした。それまでのアテネの長い歴史、その素晴らしい学問、芸術、哲学、文化もすべてを〈無知の時代〉(30)と一言でかたづけてしまうような全く〈新しい教え〉です。新しい知識です。それは〈イエスと復活〉を知る知識、〈イエスと復活〉によって神を知る知識です。

さて、それでも彼らは「好奇心」だけは旺盛でした(19-21)。「もうこれ以上何も聞かない」よりはましかもしれません。その結果は 32 節以下に記されています。結局多くの人々は、ただ〈耳慣れないこと〉〈新しいこと〉、面白い話を聞いて、話の「ねた」にして面白がるとか、知識をひけらかしたかっただけのようです。そうやってどんどん高慢になると、〈イエスと復活〉のこと、真の神のことは分からなくなってしまいます。後にパウロは言います。〈知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。そ

れゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです〉（Ｉコリント 1:20−24）。

現代の日本も、「町が偶像でいっぱい」です。神ならぬ神々でいっぱいです。「お盆」の時季です。何かと「地域の絆を強めるため」に「祭り」が行われます。「戦争をしない誓いのため」と言って「日本の侵略戦争を正当化し美化し推進する靖国神社」に政治家が参拝します。そうやって偶像礼拝を民衆に推奨しています。民衆も知ってか知らずか「大日本帝国と天皇のために無駄に殺された」「皇軍（天皇の軍隊）兵士（だけ）」を「英霊」として拝み、国と一緒に再び戦争への道に向かっています。そんなふうに民衆の命も心も体もすべてを捧げさせようとするものこそ「偶像」です。そんな「空気」の中で、私たちキリスト者、教会は偶像礼拝を断固拒否し、困難を耐え忍び、〈神の力、神の知恵であるキリスト〉〈イエスと復活を宣べ伝え〉、すべてを捧げて愛し、信じ、仕えるべき唯一絶対の真の神を証ししていかなければなりません。